

だるま産地の地域を繋いだ挑戦ー 伝統産業を、成長産業に

渡邊 高章 福島／白河だるま総本舗14代目

産地の思い結ぶ「福の豆だるま」



白河だるま

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりを挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016

年プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒孝子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロジェクトはふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主権のチャリティーイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。



プレゼンの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロジェクトを製作するコラボレーションプログラムを発表。「コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（OMARTAKクリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALLREALLAGE代表取締役社長）、デザイナー（辰野しずか氏）（クリエイティブディレクター）が登壇し、思いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア、デザイナー関係者などに向けて

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

「伝統を守りながら」「新しい感覚やテクノロジーを吹き込む」地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。福島県選出の匠、渡邊高章さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



1月24日、プレゼンテーションにて

縁起物として広く親しまれているだるまは、生産される地域によって形状、彩色、材質などが異なっている。福島県内だけでも6種類のだるまが存在する。その違いは、地域ごとに一目見ただけでわかるくらい特徴的であり、地域性を表す。江戸末期から白河だるまを製作する白河だるま総本舗の14代目、渡邊さんは、県内6種類のだるまの本格的なデザインを手のひらサイズに施したプロジェクト



渡邊さんが14代目を担う白河だるま総本舗

ら、新たな福島土産として広め、手にした人がその地域を知るきっかけになることを願う。

福島県内には白河だるまのほか、三春だるま、矢野目だるま、いわきだるま、会津だるま、双葉だるまの6種類があり、中にはすでに作り手がいないだるまもある。黒い目玉が入っているだるまや、折鶴や松竹梅で肩やひげが施されている。沿岸部では海を表現し、群青色が顔の周りに塗られていたりする。農業が盛んな地域では米俵を表した金色があしらわれてい



助言した川又氏（右）と渡邊さん

る。いずれも生活や文化、願いを表している。

だるまは、立体を紙素材で形成する「張り子」と呼ばれる技術によって作られる。先人たちが培い、継承し続ける技法によって栄えた文化、産業を渡邊さんはさらに発展させるため、自らの好奇心と挑戦心を大切にしている。だるまを基本軸に置き、そこに別の何かを掛け合わせることで生まれる「面白さ」に挑戦し続けている。だるまを形成する技術の「張り子」と、デザインする技術の「絵付け」を駆使して、他業種とのコラボレーションを活発に繰り広げている。

プロジェクトでは、価値のあるプロジェクトの製作に取り組みうとテーマ設定に熟慮した。一度は製作をはじめたものの納得いかず、プロジェクトの後半で方針を大幅に変えた。ゼロからのやり直しで、焦りも大きかった。しかし技術と地域文化を繋ぐプロジェクトの完成に向けて、しっかりと踏み出した。



様々な絵筆を用いる



細かな絵付け技術が光る



一つ一つの仕上がりを確認する渡邊さん

小さなだるまに本格的なデザインを施すことは、大きなだるまに描くより難しいため、繊細な絵付け技術が必要となった。さらには、県内産地それぞれが、だるまという伝統的工芸品に地域性を映している。デザインに込められた思いを正確に表現し、県外の人たちに本県のだるま産業の多様性を伝えたい。

渡邊さんは、各産地のだるま職人らにプロジェクトの目的などを丁寧に説明し、使用の許諾を得た。その地域で継承される工芸品を他の地域の手が製作することを懸念したが、渡邊さんの思いに賛同し、応援してくれる声も掛けられた。2016年度のLEXUS NEW TAKUMI PROJECTにおける福島県の匠、橋本彰一さんは「福島の張り子産業、だるま産業を盛り上げていく」というエールを送った。渡邊さんの勇気に多くの作り手たちが応えてくれた。サポートメンバーの川又俊明氏は「これまでの多様なプロジェクトをプロデュースした観点から、白河だるまも福島らしさを出してほ

しいエアドバイスした。だるまとしての価値や消費者への訴求方法など多角的に助言した。完成した「福の豆だるま」は各地の特徴を見事に表している。目玉や色使いだけでなく、表情の違いも丁寧に描いた。手のひらサイズでかわいらしい6つのだるまは、神棚だけでなく、リビングや玄関などに飾りたくなる工芸品だ。関などに飾りながら、インテリアとしても幅広い世代からの注目が

「縁起物としての伝統を大切にすることはぜひ望む」とのこと。これからも新しいチャレンジをする。だるまのファンを増やしていきたい。先を見つめる。だるまのよう、に辛抱強く七転び八起きの精神を持ちながら努力を続ける渡邊さんの今後の活躍を期待したい。



完成プロダクト「福の豆だるま」

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。



渡邊 高章 福島／白河だるま総本舗14代目

福島県白河市で約300年の歴史をもつ白河だるま総本舗の14代目。大学卒業後、カリフォルニア州立大学サンディエゴ校でビジネスを専攻する。帰国後、ファッション業界での勤務を経て、家業に従事する。2016年には「伝統工芸はデザインで生まれ変わる。」をキャッチコピーに新ブランド「Hanjiro」を立ち上げ、様々な企業とのコラボレーションやデザイン性に特化した商品製作する。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT